

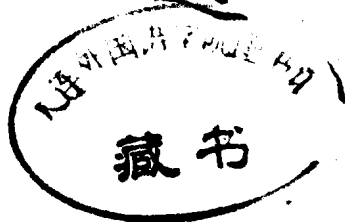


日文 701527554

188497

森
鏡
三

黃
表
紙
解
題



中央公論社

檢印廢止

©一九七二

昭和四十七年十一月十日印刷
昭和四十七年十一月二十日發行

定價一六〇〇圓

書名 黃表紙解題

著者 森 銑 三

發行者 山 越 豐

印刷 圖書印刷株式會社

製本 協和製本株式會社

製作 ブック・ビジネス

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一—
電話(五六二)五九二二
振替東京三四

3095—010518—4622



黄表紙の表紙

上右 米饅頭始

上左 太平記萬八講釋

下 吉原大通會

(大東急記念文庫蔵)

內
容
目
錄

序 說

二

戀川春町

金々先生榮花夢(自畫)

三

金山寺大黑傳記(自畫)

三

化物大江山(自畫)

六

猿蟹遠昔噺(自畫)

六

其返報怪談(自畫)

三

寶船福正夢(自畫)

三

高慢齋行脚日記(自畫)

四

惡拔正直曾我(自畫)

九

三升增鱗祖(自畫)

四

郭德費字盡(自畫)

一〇

辭鬪戰新根(自畫)

四

通言神代卷(自畫)

一〇

芋太郎屁日記咄(自畫)

五

其昔龍神噺(自畫)

二

三幅對紫曾我(自畫)

三

萬載集著微來歷(自畫)

一〇

間違曲輪遊(自畫)

六

吉備能日本智恵(自畫)

二六

無益委記(自畫)

六

吉原大通會(自畫)

二三

我頼人正直(自畫)

七

米山鼎我(文溪堂)

萬福長者玉（鳥居清經畫）

一四〇

怪談豆人形（鳥居清經畫）

一四七

曲輪雀大通先生（右同）

一四六

朋誠堂喜三二

親敵討腹鼓（戀川春町畫）

一四九

見得一炊夢

一五三

鼻峰高慢男（右同）

一五〇

景清百人一首

一五五

桃太郎後日嘯（右同）

一五三

恆例形間違曾我

一六六

珍獸立曾我（右同）

一五五

三太郎天上廻

一六九

女嫌變豆男（右同）

一五六

長生見度記（戀川春町畫）

一七一

鐘入七人化粧

一六〇

太平記萬八講釋（北尾重政畫）

一七三

龍宮四國噂

一六二

深川 錦鱗

花見歸嗚呼怪哉（戀川春町畫）

一七五

變名用文章（戀川春町畫）

一八一

鈴木 吉路

月星千葉功（戀川春町畫）

一八四

物愚齋於連

安永七郎大福帳（蘭德齋春童畫） 一六

不量軒

織助風始 一六

林生

黃金山福藏實記（鳥居清長畫） 一六

日張堂少通逸人

開帳利益札遊合（北尾政演畫） 一九

市場通笑

瞽仙人目明仙人（鳥居清長畫） 二五

二度目の龍宮（右同） 二五

ついぞない弟の甚六（右同） 二五

間違月夜鍋（右同） 二六

化物鼻が挫（右同） 二六

もちは餅屋（鳥居清長畫） 一九

金持曾我（右同） 二二

豆男江戸見物（右同） 二三

猫嫁入 二五

千里走虎之子欲（鳥居清長畫） 二六

文月さゞげ畑（北尾政美畫）

三〇

一つ星大福長者（北尾政美畫）

三三

忠臣藏十二段目（春英畫）

三一

正説河童呪

三四

吳増左

初夢富士高根（鳥居清經畫）

三五

金平異國遠

三七

松臺舍

東都見物左衛門

三九

柳川桂子

昔扇金平骨

三〇

白馬

大強化羅敷（北尾政演畫）

三三

秋花

七福神親方（鳥居清經畫）

三四

芝全交

時花吟翫茶曾我（北尾重政畫）

三三

當世大通佛買帳

三六

通一聲女暫

三七

鶴の者雄

三六

交古世むかし嘶

三八

茶羅毛通人（鳥居清長畫）

三〇

大違寶船（北尾重政畫）

三三

親どふしよふ桃太郎（右同）

三二

山東京傳（政演）

米饅頭始（北尾政演畫）

三三

客人女郎（北尾政演畫）

三四

娘敵討古郷錦（右同）

三五

廓中丁子

三五

御存商賣物（右同）

三六

天慶和句文（北尾政演畫）

三六

四方屋本太郎

虛言八百萬八傳

三七

社樂齋萬里

大通一寸廓茶番（勝川春朗畫）

三七

岸田杜芳

通増安宅關（鳥居清長畫）

三九

市川三升圓（北尾政演畫）

三〇

草雙紙年代記（北尾政演畫） 二六

年中故事附錄（北尾政美畫） 二六

能時花升 二六

伊庭可笑

大津名物（北尾政演畫） 二六

化物箱入娘（鳥居清長畫） 二六

朝日奈唐子遊（右同） 二六

福德夢相大黑銀（北尾政美畫） 二六

四方赤良

源平總勘定 二六

此奴和日本（北尾政美畫） 二六

南陀伽紫蘭

出見世吉原（北尾政美畫） 二六

遊客古事附太平記（北尾政演畫） 二六

仲之町畫夢見草（北尾政美畫） 二六

全盛大通記（北尾政演畫） 二六

狂言好野暮大名（北尾政美畫） 二六

化物世繼鉢木（鳥居清長畫） 二六

昔咄虛言桃太郎（右同） 二六

化物仲間別 二六

頭てん天口有（春潮畫） 二六

五郎兵衛商賣（北尾政演畫） 二六

不笑之亭君南子

七轉八興小町（北尾政演畫）

三五

是和齋

四天王大通仕達（勝川春朗畫）

三七

宿屋飯盛

櫻草野邊錦（勝春林畫）

三八

奈蒔野馬平人

啞多鴈取帳（喜多川歌麿畫）

三九

竹杖爲輕

萬象亭戲作濫觴（北尾政美畫）

四〇

嘘無誠一卷

四一

古阿三蝶

壽御夢想妙藥（古阿三蝶畫）

四二

從夫以來記（喜多川歌麿畫）

四三

大倭智恵親玉（古阿三蝶畫）

四四

幾治茂内

化物七段目

黑鳶式部

他不知思染井(喜多川歌麿畫)

若松萬歳門

御正體開帳(北尾政美畫)

無中點作

華都末廣扇(勝春道畫)

龜遊女

龜遊書草紙(喜多川歌麿畫)

唐來三和

大千世界牆の外

作者未詳

三五

三四

三七

三〇

三二

三七

妖怪仕内評判記(戀川春町畫)

三〇四

甚左紅絹由來(戀川春町畫)

三〇六

中澗花小車

三〇三

菓物見立御世話咄

三〇九

名代干菓子山殿(鳥居清長畫)

三〇六

通者云此事

四〇三

日東國三曲之鼎(北尾政演畫)

三〇八

晒落模様飛羽衣

四〇六

腹京都食物合戰(戀川春町畫)

三〇九

運附太郎左衛門咄(北尾政演畫)

四〇六

旭緣起那須野倂

三一一

七笑貞當世姿(右同)

四〇七

名取菊黃白長者

三一二

一の富見得の夢(右同)

四一〇

書名索引

四一一

後記

四一五

題字 森 銑三

序 説

一

和歌や俳句などの短い形式の詩の行はれてゐるわが國に、黄表紙といふ、その形のまた極めて短い散文の文學作品の生れてゐるといふ事實には、何かそこに偶然ならぬものがあるやうに感ぜられる。殊にそれは江戸時代の中期に、川柳や狂歌と時を同じうして作られてゐるのであり、一つの氣運のおのづから然らしめるもののあつたのであらうとも考へられる。

黄表紙は、美濃判半截といふ小形の繪本である。一冊は僅か五張から成つてゐる。その一冊だけで讀切りの作品も少しはあるけれども、大抵は二冊乃至三冊から成つてゐる。しかし、それにしても十張、十五張といふのであるから、まことに片々たる小冊子に過ぎない。従つてそんな小冊子では、内容は高が知れてゐようと速斷せられさうであるが、それが存外さうでない。よしその形は小さくても、黄表紙には黄表紙特有の生命の存するものがあつて、それが今日の私等をも惹きつける。形が小さいといふだけで、それを輕蔑することは出来ない。

黄表紙は最初から、一冊五張といふ制約の下に作られた。そしてそれは、それ以前から行はれてゐる赤本、黒本の形式をそのままに襲うたものだつた。それで黄表紙も、赤本、黒本と併せて、草雙紙の名でも、現に呼ばれてゐるけれども、黄表紙は赤本や黒本とは截然區別して扱はなければならぬものだといふことを、最初から知つてかかる必要がある。赤本や、黒本は、單なる繪本といふに過ぎない。よし多少の文が添へてあるにせよ、それは繪解きの程度を出でない。赤本や黒本は、見るものではあつても、讀むものとまではいはれない。それらの生命は、どこまでも繪にある。繪が主であつて、文は従といふに過ぎぬ。だからそれらには、畫工の名は明示せられてゐても、文の作者の名までは、出してないものが、大部分である。さうした唯の繪本といふに過ぎない、文學作品とまでは呼ぶことを得ない赤本や黒本を、山崎麓の『日本小説書目年表』（以下『小説年表』）に載せてゐるのは、よし黄表紙との關係があるにせよ、少しどうかしてゐるものなのである。

黄表紙は、黒本を母胎として生れた。だから同じく面毎に繪を出して、その繪の餘白に、僅かの文を出してゐるだけのことで、繪本の體裁をどこまでも備へてゐる。しかし黄表紙の方は、單なる繪本なのではない。それらの箇々には、それぞれの作者があつて、その筋を立案して、まづ文を作り、春町や京傳などの、自ら繪をも畫いてゐる作者の場合は別として、その文と繪組の案とを畫工に廻して繪を作らせる。さうした過程を履んで、一の作品が成るのであり、黄表紙に於ては、どこまでも文が主であつて、繪は從の地位に置かれる。黄表紙は、讀むと同時に見るべき、特殊な性質を持つてゐるとはいへ、黒本とは違つた文學作品となつてゐる。黄表紙は、赤本、黒本とは全然別種のものとして扱はねばならぬのである。

黄表紙は、戀川春町に依つて創始せられた。それで春町は、黄表紙の創始者としての榮譽を擔つてゐるわけであるが、黄表紙といふ特殊の文學を、これまでの文學史家の人々は、正しく認識しようともせず、春町その人を特別に扱ふことをしなかつた。従つて近世の文學史上に於ける春町の地位といふものは、今日に於ても、定まつてゐない状態にある。黄表紙そのものは、外觀的には片々たるものであるし、春町作品の數も、それほど多くはないのであるから、春町その人は、輕々に看過せられることになつてしまつてゐるのであるが、文學者として黄表紙作家としての春町は、なほ今後に於て、見直されなければならぬ作家だといふことを、はつきりいつて置きたい。

安永四年の春、その春町の『金々先生榮花夢』の上下二卷が出た。これを以て黄表紙の第一作とする。たまたまその年よりして、草子類の版元達が、申合せをしたのであらうか、それまでの黒本の黒表紙を廢止して、明るい黄色の表紙に變へ、黒本の黒の一度摺の繪外題をも、簡素ではあるが、數度の色摺のものにした。それで春町の新作品は、從來とは別の新裝を凝らして、世上に贈り出された。さうしてこれまでの地味な表紙が用ひられずに、その内容にふさはしい明るい感じのものが使はれたといふことは、春町に取つて、まことに好都合のことだつたといつてよく、或はそれは春町の方から版元に要求し、版元側でその希望に應じたのであつたらうかと、考へられぬでもない。しかしその改裝は、春町の『金々先生榮花夢』に限つてしたのではなく、從來の畫工達の手に成つた舊態依然たる黒本系統の作品をも、一樣に黄色表紙に改めたのであり、その種の外觀だけの黄表紙も、その後にも數多く作られた上に、それらも一樣に